

名残の月

三鷹 奇異高

## 名残の月

---

「山口、プレゼンの資料どないした？」

「ああ、データ処理済みです」

俺はPCのキーボードから目を離し、課長の方に振り返る。

大阪にきて早三ヶ月、この企画室の面々ともやっと慣れてきた。

「マサヤン、今日のお昼どないする？」

割り込んできたのは、室長の木村さんだ。

「室長、話割り込まんといて下さい」

眉をしかめながら課長が苦言を呈する。

「そやかて、もう昼やん。今日はどこいこか？」

「もお～ 室長にはかなわんなあ～、山口昼からでええで」

課長のこの呆れ口調をお隅付きとはがり、

「マサヤン、許可もろうたし、はよ、行こか」と相変わらずの強引マイウエイだ。

この天真爛漫な人は俺と四つしか違わないのに、既に室長とかなりのやり手らしい。

転勤してきて最初に声をかけられた。

それも突拍子もない台詞でいきなり告られた。

「めっちゃタイプや、恋人おらのやったらつきおうてえなあ～ ええやろ」

本気か、おふざけかどうも関西弁はニュアンスが微妙だ。

それにクリエイティブの才能もない俺が営業と思っていたらこの企画室に配属されたものだから青天の霹靂？って心境だ。

おまけに室長は昼、夜お構いなしに食事に誘ってくる始末。

「好きやでえ～ ほんまに好きや」

この馬鹿の一つ覚えのような台詞をことある毎に聞かされている。

どこまで本気なのか…。

「もうふざけないで下さい」

「なんで信じてくれへんの、俺めっちゃ悲しいわ」

あまりのしつこさに本気で対応すればスルリと大阪弁でかわされる。

全く振り回されっぱなしだ。

そんな忙しい日々を過ごす中、あれから三ヶ月たったが鍋島からは薄情な事に連絡の一つもない。

まあ～こちらからも連絡していないが……。

今頃は例の如く俺の後釜が奴の身の回りの世話を焼いているのだろう。

でも三ヶ月も電話の一つもメールの一つも寄越さないと言うのはマジムカつく。

その日、会社から帰りの電車の中で珍しい奴から着信があった。

車中で取る訳にも行かず、一旦自宅に戻って落ち着いてから折り返した。

相手は二回のコールで出た。

「はい、嶋田です」

「ああ、山口だけど…電話した？」

「おお、山口。今、電話いいのか？」

「ああ、仕事終って自宅だから、何？」

「今年の忘年会どうなってる？」

「あっ？」

すっかり忘れていた。

いつの間にかカレンダーも残り一枚となり、何かと気忙しい時期到来だ。

仕事柄、来年の夏キャンペーン着手でこの業界にいと季節感に頓着がなくなる。

そう言えば忘年会は年末年始は修羅場の鍋島に変わって俺が取り仕切っていたのだ。

身動き取れない奴に合わせて、あのボロ屋で毎年恒例の宴会騒ぎをしていた。

今年は勿論無理だ。

その事を断ろうと口にする前に嶋田の方が口火を切ってきた。

「忘年会、申し訳ないんだが有村と温泉行く予定にしてるんだ」

先に断りを告げられ、予想外の展開になぜか寂しさが過った。

「そうなんだ……」

「それに鍋のとも色々あるみたいだし」

嶋田の意味深な言葉に俺は思わず問い質した。

「な、なに色々って？」

「えっ、知らないの？」

「あ、うん……最近忙しくて会ってないんだ」

「なんだそうか、いやあ～ あいつもそろそろ年貢の納め時かなあって」

その言葉の意味が瞬時に読め、心臓が鷲掴みされたように追い詰められた気分になった。

「年貢の納め時って……」

その真意を確かめずにはいられず恐る恐る尋ねた。

「ああ、この前用事があって言ったら女がいてさ。やけに甲斐甲斐しく鍋の世話焼いてるんだよ」

「へえー」

生返事の俺は、（いつものお持ち帰りで、それでもって勝手に勘違いしてる馬鹿女辺りじゃないのか）と、まるで自己防衛の如く都合の良い方に解釈した。

しかしそれは予想もしない言葉で覆された。

「なんか毎週掲載してるコラムの新しい担当だとかで、鍋も満更でもないみたいで半同棲してるっぽい」

その言葉に俺の一縷の望みは見事に原型も留めず砕け散る。

（半同棲だって……俺でさえ通いだったのに）

ふっと力が抜け、ガラガラと音を立てるように膝から崩れ落ちた。

「そ、そうなんだ」

「ああ、てっきり山口も知ってて今年の忘年会は何も言ってこないのかと思ったんだけど……鍋に聞こうにも今修羅場中だしな」

「う、うん。俺も今年はめっちゃ忙しくそれどころじゃないんだ……ちょ、丁度良かったよ」

さっきのショックで気も漫ろで、なんか適当に受け流しているのが自分でも分る。

頭の中がごちゃごちゃで話に集中出来ない。

俺は一刻も早く電話を終らせてしまいたかった。

「わかった。こっちも助かったよ」

嶋田の短い返事に、

「うん、じゃあ有村と楽しんでこいよな。ご馳走様」

そう震える声をどうにか誤魔化し抑えつけて話の終わりを促せば、  
「お、おう」

語尾に力を入れて能天気な男は電話を切った。

電話で良かった。

今のこんな姿、誰にも見咎められず本当に良かった。

床の上には我慢しきれずに嗚咽と共に滴り落ちた涙の跡。

会話を切ったと同時に胸に競りあがった物が一気に溢れ出た。

自ら手放したのに、人の物になったと知ると途端に募る未練。

だったら初めから死守し通せばよかったのにと後悔の嵐。

こんなに苦しい思いはしたくないと散々悩んだ挙げ句の決断だったのに、

あっさり手放されてしまった俺の立ち位置が哀れでならない。

こんなことなら、ずーと友人という永遠の定位置で我慢しておけば良かった。

何もかも手に入れたいと欲を出したばかりに、罰があたった。

また以前一度別れたような苦難の日々が来るのかと思うと心が焼切れそうだ。

だが今のこの距離は有難い。

目にする事も耳にする事もなければ以前より少し楽に息が出来るような気がする。

そうだ、携帯番号も変えよう。

最後の砦のように捨て切れなかった番号。

最初のうちは何度も着信を確認する毎日だった。

今ではすっかり諦めてしまった奴からの着信履歴。

俺は涙も乾かぬまま、手の中にある少し古い機種 of 携帯をじっと見つめた。

翌日、昼からの外回りを利用して携帯ショップで機種変と番号もアドレスも全て変えた。

データは必要なものもあったのでそのまま一旦移してもらったが、すぐに鍋島のアドレスは消去した。

嶋田のアドレスはPCのフレッシュメモリーに残してあるのでこれも消去した。新しい番号は嶋田にも教えない。

嶋田からは滅多に連絡は無いから問題ないだろう。

それこそ年に一度の昨夜のような忘年会の話くらいなもので、それさえ俺から連絡する事はあっても奴からかかってくる事はない。

徐々に距離をおけるから、まず不義理になる心配はないだろう。

鍋島のアドレスを消去するのになんの躊躇もなかった。

むしろ別れの儀式のようで、何かを吹っ切れたような気さえした。

だが暮れも押し迫った師走前に、何故か逃げ出したあの街を再び訪れる事となった。

夏の化粧品のCMで本社とのタイアップの為、明日から二泊三日の予定で東京に出張になったのだ。

こんな時期にと思わず舌打したくなった。

東京駅につき、知った街並みをタクシーの車窓から目にすれば、師走の風景は大阪のごった返した感じの賑やかさと東京のその均等の取れた華やかさとは同じ都会でもその趣は全く違った。

だが三ヶ月ぶりの都会の空気は懐かしく纏わり付いた。

例の室長との出張に喧騒を覚悟していたが、営業一課の豊島さんの同行もあってか珍しく静かだった。

やはりあの派手な誘いは転勤で慣れない僕へのパフォーマンスだったのかも知れない。

昼間に到着してそのまま本社に赴く。

慣れた社中を歩けば、知った顔から声がかかる。

「山口君はやっぱこっちでもなんや人気者なんやなあ〜」

木村室長の本日一番の揶揄いが口を付いて出た。

「人気者ってなんですか、まだ三ヶ月だから忘れられてないだけですよ」

そう言って苦笑しながら、わずか三ヶ月でも忘れてしまえる鍋島の事がふと頭を過り思わず自嘲した。

東京のプロジェクトチームとの打合せを終え、一旦ホテルにチェックインした後、顔合わせと称した飲み会に呼ばれた。

いつも使う居酒屋に道案内を兼ねて木村室長と豊島さんを引き連れて行く。

プロジェクトの中には入社以来の同期も何人かいてそれなりに盛り上がった。

二軒目はお決まりのカラオケに雪崩れ込み、そこで粗方解散となった。

豊島さんはそのままホテルへと帰り、木村室長は俺の行きつけに連れて行けと駄々を捏ねられ仕方なくボトルのキープしてある居酒屋『神楽』へ連れて行った。

大学時代から常連で、大将の竜平さんとも顔見知りだ。

この時間だと店もそろそろ落ち着いているころだろう。

日本橋のオフィスビルの狭間にある『神楽』は間口は狭いが、店内は奥行きがあって見かけより広い。

暖簾を潜るとやはり客の姿も疎らだ。

入り口付近でどの席にするか物色していると信じられない光景を目にした。

そこには出不精の鍋島の姿があった。

そしてその横には見知らぬ女がいた。

日頃、編集者やディレクターにどんなに誘われても外食は面倒くさがり殆ど断っていた。

その癖、嶋田の誘いだけは決して断らなかった。

だから今日もそうなのかと思わず嶋田の姿を探してしまったがどうやら来ていないようだった。

俺は彼を思いあぐねて入り口付近で立ち往生していると、

「なんや、どないしたん。中すいとるみたいやで」

木村さんが俺の肩貸しに中を覗き込む。

「ああ、ですね」

ど、どうしよう。このまま中に入っていけば嫌でも鍋島に気付かれる。

俺の煮え切らない態度に流石の木村さんも何か勘付いたみたいで、

「違う店でもええで、他行こか」

そう言うといきなり踵を返し店を出た。

俺も慌ててくぐった暖簾を後戻りして、戸を閉める。

幸い大将に見咎められずに店を後にすることが出来て安堵する。

「さあてと、今日はお開きやな。このまんまホテル帰るで」

木村さんが前を歩きながら俺に声をかけてきた。

「えっ！ でも」

俺は木村さんの機嫌を損ねたと慌てて留める。

「ええて。なんも気にせんで、こっちの出張は今回だけやないから」

「次来た時はさっきの店連れてってえな」

そう次の約束を匂わされて、なぜか俺の胸の内を見透かされたような気がした。

俺の視線の先に木村さんも気付いたのかも知れない。

「まあ～ 遠距離はやっぱ難しいちゅーことやな。一緒におった男より山口の方がええ男やのにな。見る目ない女なんか振ってまえ」

そう言われ、俺は木村さんの勘違いに思わず吹いた。

「なんや、笑うとこやないやろっ！」

怪訝な顔の木村さんから突っ込まれ、

「す、すいません。なんか馬鹿らしくなって……」

俺は苦笑しながらいい訳した。

「まっ！ 笑えるくらいならそんな重症でもないんねんな」

木村さんはそう言うと夜空を見上げた。

俺は来た道を木村さんと戻りながら、鍋島と一緒にいた女性を思い出していた。

いつもの派手な感じの女達とは真逆な雰囲気タイプのタイプだった。丁度斜め横だったので、鍋島の方が背中を向け女性の方が正面に見えた。

眼鏡をかけて髪の毛も無造作に一つに束ねていた。

顔もパツとしない地味でどうかすると野暮ったいイメージがした。

あまり凝視した訳ではないが、そういうパツとしないタイプは今まで回りにいなかったのも逆に印象深く目に焼きついた。

そして正しくそれが嶋田の言った半同棲説の信憑性を裏付けているような気がした。

それに男女関係なく二人きりで外食している鍋島の姿など一度も目にした事はない。

長年傍にいた俺でさえ、外食を嫌がる奴の為に甲斐甲斐しく自宅まで食事作りに通ったのだ。

居酒屋に行くのだって嶋田がらみか、サークルの仲間達と大勢の時だけだ。

だから絶対ありえないツーショットに我が目を疑い、かなりの衝撃を受けたのだ。

ここにきて自分から捨てた想いのはずが、今はすっかり捨てられた気分だ。

その寂寥感に押し潰されそうになる。

長年暮らして馴染んだ筈のこの街が今はやけに余所余所しい。

賑やかなネオンも人込みも何もかもが鬱陶しい。

硬質な空気に肌寒さを感じ思わず身震いした。

目の前を歩く男の足取りを見詰めながら、その優しい関西弁がたった三ヶ月のあの地を懐かしくさせる。

早く帰りたと思った。

同じ賑やかさでも住めば都と身の内に優しい。

「大阪戻ったら美味しいたこ焼きつくったるから、なっ！」

振り向きながら木村さんが口にした言葉に思わず胸が熱くなった。

本当に要所要所をしっかりと絶妙なまでに抑えてくる。

この人を好きになれたらいいのにと考えた。

きっとめちゃうちゃ大事にしてくれるような気がする。

いっそ、この空洞を埋めて貰えたら……。

「し、室長！」

俺の呼びかけに前を歩いていた木村さんがゆっくり振り向いた。

「お、俺……」

そこまで言いかけて一気に顔が熱くなっていった。

(な、なに考えてんだ！)

目の前に啞然として立ち竦む木村さんの姿があった。

俺は恥ずかしさに慌てて視線を外し俯いた。

心臓がバクバクしている。

何も考えられず、じっと足元だけ見つめていると…いつの間にか俺の革靴の前に向き合うように室長の革靴のつま先が見えた。

ハッと気がつき慌てて顔を上げると行き成り抱き締められた。

「あ、あの」

「ええから… ホテル帰って慰めてやりたいねんけど…あかんねん」

「え…」

木村さんの言っている意味が分からず啞然としていると、

「俺にもプライドっちゅう一もんあんねん。誰かの変わりはな…」

そう言葉を断ち切る。

俺、なにしようとしてたんだろう。穴があったら入りたい…。

そう思うと自然と体が強張った。

「それと…俺さっき勘違いしてんねんな一、彼女やなくて野郎やったんやろ？」

俺はその言葉に思わず体をビクつかせ、まるで観念したかのように小さく頷いた。

「やっぱそうやったんや、そんならなおさら仕切り直しやな」

「え、仕切り…直し？」

室長の意味不明な言葉にそれまで恥ずかしくて腕の中で俯いたままだった俺は顔を上げた。

間近に迫った室長は俺の視線を捉えて、

「せや、好きなんはほんまやで一 せやけど山口は同類かどうか今一つ分らへんかってん」

「でもこれでハッキリしたさかい、今までの事はここでリセットや。ほんで大阪帰ったら仕切り直しや。今度は冗談にせんといてや」

「え〜と、その…リセットですか？」

俺は顔を真っ赤にし、なんと答えて良いか分からずしどろもどろになった。

すると木村さんの優しい眼差しが近づいてきた。

ゆっくり唇が重なる。

俺は温かい腕の温もりに泣きたくなった。

包み込むような口づけに身を委ねた。

(リセットか…。

そうだな…鍋島も既に新しい道を歩んでいるようだし、俺一人がここで足踏みする訳にはいかない。

新しい恋を…してみるか) そう心の中で呟いた。

さっきまでの息苦しさが少し軽くなったような気がした。

木村さんは俺を抱きしめる腕を解き、そのまま肩に手を回すと帰りを促す。

そして俺達は、ネオン瞬く街の喧騒を後にした。